

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：32514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530833

研究課題名(和文) 放課後生活空間評価尺度の作成と活用

研究課題名(英文) Development and use of scales of after-school life for children and students

研究代表者

蓮見 元子 (HASUMI, MOTOKO)

川村学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：60156304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：小学生から中学生、高校生、大学生までの放課後の生活空間を評価できる信頼性・妥当性のある尺度を作成した。これらの尺度は、放課後の生活を自己点検評価できるように作られた。また、調査や面接、観察によって、各学校段階における放課後の生活を明らかにした。調査対象は、小学生の保護者1621名、小学生・中学生・高校生・大学生の計980名であった。小学生と保護者の回答間には、概ね有意な正の相関があった。放課後は将来を見据えたキャリア教育の場という意味合いがあるが、学年が上がるほど、学習時間が減少していた。地域の関係する成人への面接調査から、活動環境づくりが重要であることも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Reliable and valid scales of after-school life for children and students in primary, junior high and senior high schools and universities have been developed. The measures are designed for the children and students to make an individual self-inspection and self-rating for the after-school life. The actual situations of the after-school life are also surveyed through investigation, interviews and observations with 1,621 parents in primary schools and a total of 980 students in each stage of schools. The survey can give good correlations between the answers by the parents and those by primary school children. After school hours provide children and students with opportunities for career education for the future, but their learning time decreased as their grade in school advances. Interview study of local adults has revealed that creating supportive after-school environments for them is important.

研究分野：教育心理学

キーワード：放課後生活 小学生 中学生 高校生 大学生 放課後子ども教室 尺度 自己点検評価

1. 研究開始当初の背景

今日の子どもたちが社会性や自主性を育む上で、放課後の過ごし方は重要である。かつては、地域で子どもたちは自然発生的に異年齢集団を形成して遊び、遊び集団を通して社会性などが育まれる「もう一つの学校」(放課後の生活空間)があった。しかし、高度成長期を境に子どもの外遊びの場が失われ、また、情報化社会の進展に伴い遊びが変容し、さらに塾、習い事などに通う子どもが多くなり、自由に主体的に遊ぶことはまれとなった。我々は子どもの放課後の生活実態に対する危機感、および子どもの健全な育ちを支援する立場からここ10年ほど小学生の放課後の過ごし方や「放課後子ども教室」に関して、行動観察、面接調査、質問紙調査、タッチパネル式アンケートなど、多様な方法を用いて、子どものみならず、放課後生活にかかわる大人に対しても多角的側面より研究を行ってきた。児童期の子どもにとっても青年期の学生にとっても、放課後の生活はキャリア教育の意味から重要であるが、放課後を無為に過ごすことなく、各自のキャリアを形成する場になっているであろうか。放課後の生活を子ども自身が自己点検できるような評価尺度の作成が求められる。

折しも放課後子どもプラン(平成26年度からは育児支援も加味された放課後子ども総合プラン)の下で、各地方自治体は、放課後子ども教室などを設置し、地域の住民の協力を得て、放課後の子どもの居場所を作り、児童に体験や交流活動を提供する場としている。その点検評価を行う上で子どものすこやかな育ちに関わる適切な指標づくりが求められているといえよう。放課後子ども教室の設置効果、児童や保護者(利用者側)から見た満足度、自治体職員や運営スタッフ(提供者側)から見た評価などについて定期的に評価を行い、より良いサービスを提供するために必要な運営の見直しと改善を再検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1)タッチパネル式アンケートによる自己点検評価システムの完成を目指す。前年度に引き続き、スマートフォンで利用できるようにアンケート装置の開発を行う。タブレット端末は画面が大きいため年少の児童本人でもアンケートに回答可能という長所があるが、所有している家庭が少なく、調査が困難であった。スマートフォンでのアンケートアプリケーションは画面が小さく、児童本人による回答は困難であるため、保護者と児童が共同して回答を行うものに修正したい。最終年である平成26年度は数組の母子にモニターになってもらい、アプリケーションの使用感や改善意見を得て、アプリケ

ーションを完成させる。

(2)これまでの研究から得られた放課後の生活にかかわる質問項目を精査して信頼性・妥当性のある放課後生活空間評価尺度(低学年用・高学年用・高校生用・大学生用・成人用)を作成する。そのためにまず研究の核となる小学生保護者用放課後生活空間評価尺度を焦点化して、尺度の全体像を構築し、尺度完成に向けた大規模調査を実施する。それらを集計し、因子分析などにより質問項目を精査し、さらに尺度の妥当性、信頼性についての統計的検討を行い、信頼性・妥当性のある尺度として完成させる。妥当性の検証として、他の数種類の既存の尺度との関連性、低学年児童用、高学年児童用との相関分析を行う。

(3)学童期対象の保護者用、低学年児童用、高学年児童用の3種を作成した後、中学生対象の中学生用、高校生対象の高校生用、大学生対象の大学生用の放課後生活空間評価尺度を作成のための準備にはいる。そのための大規模調査を行う。因子分析などにより質問項目を精査し、尺度の妥当性、信頼性についての統計的検討を行い、小学生用と同じように信頼性・妥当性のある尺度として完成させる。さらに、これらの尺度を使って、小学生から大学生に至るまでの学校段階ごとに、放課後の生活を明らかにする。

(4)放課後子ども教室に関わる3年間の縦断データの集計、分析を行い、放課後子どもプランで創設された放課後子ども教室の育ち効果のエビデンスを得る。児童の自己点検評価についての配慮、ボランティアの継続要因についてなど調べる。研究結果を自治体(行政)が開催する放課後子ども教室の委員会では報告すると共に妥当性を確認する。

3. 研究の方法

(1)放課後の子どもの居場所においては複数の子どもが一緒におり、また個人が自由に参加・不参加を決めることができる。このような場所において、継続的に子ども一人一人の放課後についてタッチパネルによるアンケート評価を行う方法を検討した。千葉県にある小学校に設置されている放課後子ども教室にて夏休み前後の14日間、児童個人の入室時と退室時の2回調

査を行った。小学生児童 122 人(男 55 人, 女 67 人)が参加した。

(2) 小学生の放課後を全体的に生活空間として広くとらえて, 点検評価へ活用可能な尺度の作成を目ざし, 地域(首都圏郊外にある一都市)の 1 年生から 6 年生までの小学校全学年の保護者約 1200 名を対象とした大規模調査, および日本全国を範囲とした 500 名のウェブ調査を実施し, 分析を行った。放課後の具体的な行動, 「友だちと話した」「走った」「本を読んだ」などの 32 項目を設定し, この 1 週間の平日の放課後にみられたものを, 0 日(ぜんぜん), 1 日(たまに), 2 から 3 日(ときどき), 4 日(よく), 5 日(いつも)の 5 択で回答するものとした。

得られた回答を親子で対応づけしてデータベースを作成した。妥当性については, 保護者の回答と児童自身による放課後生活評価の回答の関連性, および他尺度との関連性を調べた。「安全安心」など小学生では評価が難しい環境評価も含めるべきだろうという考えから, 保護者が評価を行う放課後活動サポート尺度 21 項目も構想した。

(3) 対象: 地域の中学校, 大学で調査を実施し, 併せて Web 調査(クロス・マーケティング社)を行った。Web 調査には全国の中学生 200 名の保護者, 高校生 200 名が参加した。調査項目: 放課後の過ごし方を具体的な行動としてとらえる 27 項目。評価はいずれも, この 1 か月間の放課後(平日)にしたことを, 0 日(ぜんぜん), 1 日(たまに), 2 から 3 日(ときどき), 4 日(よく), 5 日(いつも)の 5 件法で回答を求めた。

(4) 千葉県我孫子市における放課後子ども教室(学童保育と一体型運営)・あびっ子クラブを主たるフィールドとして, 「放課後活動の変化」をとらえる点検評価のための指標づくりを構想した。保護者による子どもの放課後の評価が放課後子ども教室の利用の有無および年次によって変化するか, 3 年間の縦断データによる分析を行った。放課後子ども教室の設置時期の相違をもとに, 階層線型モデルを適用して教室の設置効果の検証を試みた。

さらに, 小学校の協力を得て, 担任が質問紙を読み上げ指示して学級内でアンケートを行った際, 実施上にどのような課題があったかについて, 1 年から 3 年の延べ 45 学級から実施状況報告を求めた。これらに加え, 放課後子ども教室ボランティアの自己活動点検評価に関する面接による研究も行った。対象は 5 年間, ボランティアとして, 読書普及サポーター活動を行ってきていた A 氏とその仲間。5 年

間のライフラインをめぐる語りなどを採取した。

4. 研究成果

(1) 放課後の居場所でのアンケート実施の困難さから家庭において日常的に実施できるアンケートアプリケーションの試作品を開発した。インターネットに接続されたタブレット端末(Apple 社製 iPad)を用い, 子どもが家庭内でアンケートを実施することを目標として制作した。図 1 は試作されたアンケートアプリケーションの概略図である。アンケートに回答すると回答内容がネットワークを介して集計される。また子どもへの動機付けとして回答するたびに画面上にスタンプが押され, 保護者が確認できるようになっていた。

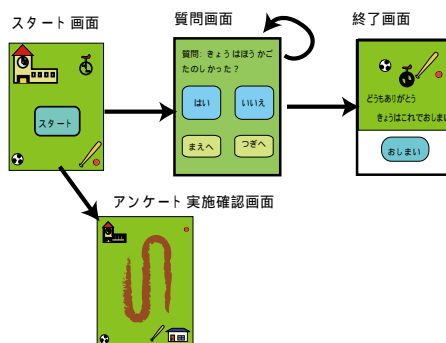


図 1 試作されたアンケートアプリケーションの概略図

(2) 小学生保護者の大規模調査の回答の探索的因子分析から「仲間遊び」「からだを動かす」「自分の時間」「室内・家族」の 4 因子からなる放課後生活の構造が見いだされた。第 4 因子を除いて, 内的一貫性は十分であると認められた。ウェブ調査では, 全国から広く収集するだけでなく, 同一対象者に対して, 1 か月空けて 2 度の調査を行うことで, 信頼性を検討した。4 因子それぞれについて, おおむね内的一貫性があることを確認した。また, 2 回の調査の間で, いずれの因子についても高い相関関係があることが認められた。これらは, 放課後生活空間を測定する尺度として信頼性に大きな問題がないことを示すものであった。保護者版については, 確認的因子分析と既存尺度(学校適応, シャイネス, QOL)回答との相関分析を完了した。児童回答との相関を検討した(表 1)。

またサポート尺度項目については, 放課後の居場所点検評価を実施している地域事例を参考として, 項目内容の構成吟味を行った。

表 1 放課後空間評価尺度 子どもと保護者との相関係数

	保護者			
	仲間遊び	体を動かす	自分の時間	室内・家族
児童				
低学年	.65 **	.47 **	.44 **	.43 **
高学年	.67 **	.61 **	.38 **	.42 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

「仲間遊び」に関しては対応する他尺度と中程度の相関がみられたが、他は弱い相関であった。

表 2 は放課後空間評価尺度と同時に実施した他尺度 (1) 親用小学生版 QOL 尺度, (2) Child Social Preference Scale 日本語版, (3) 学校適応評定の下位尺度) との相関係数を表している。

表 2 放課後空間評価尺度 (保護者用) と他尺度との相関係数

	放課後空間評価尺度			
	仲間遊び	体を動かす	自分の時間	室内・家族
小学生版QOL (親用)				
QOL	.28 **	.35 **	.08	.33 **
身体的健康	.09	.23 **	.00	.05
精神的健康	.20 *	.14	.09	.17 *
自尊感情	.16 *	.25 **	.02	.27 **
家族	.10	.21 *	.19 *	.28 **
友達	.44 **	.34 **	.04	.20 *
学校生活	.06	.11	-.03	.24 *
CSPS				
シャイネス	-.39 **	-.30 **	.03	-.02
社会的無関心	-.29 **	-.25 **	.18 *	.07
学校適応尺度				
学習領域	-.17 *	.02	-.30 **	.38 **
健康領域	-.03	.08	.01	-.10
社会領域	-.12	-.03	-.09	.07

* $p < .05$, ** $p < .01$

データの構造や特性の検証をさまざまに進めた結果、小学生の保護者用放課後生活空間尺度が完成した。

(3) 中学生・高校生・大学生用の放課後空間評価尺度を作成し、各学校段階における放課後の生活空間を明らかにした。ここでは高校生用放課後生活尺度の結果を報告する。

高校生用の 27 の質問項目で、探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行い、5 因子 24 項目からなる尺度が作成された。「自由」、「運動」、「友人つきあい」、「家族」、「勉強」とそれぞれ命名された。さらに、併存的妥当性を検討する目的で、上記の尺度と学校適応尺度との相関を見た。放課後の生活の充実さと学校での学習面の適応とでプラスの関連があった。

高校生の放課後の過ごし方で、男女別で有意な差異があったのが、「ゲームをした」(男 > 女)「家事の手伝いをした」(女 > 男)であった。進学校かそうではないかでは、「学校の勉強の

予習復習」「本を読んだ」($p < .01$)、「スポーツをした」($p < .05$)などで有意な差異が認められ、いずれも進学校の方が、平均得点が高かった。

(4) 小学校 3 年生までの 3 年間の縦断データの定量的検討から得られた知見は、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行うことで、十分な適合性を確認した。また、交差遅れ効果モデルの適用からは、個人内に一定の安定性があることも示された。一方で、放課後子ども教室の設置時期の相違をもとに、階層線型モデルを適用して教室の設置効果の検証を試みた分析では、設置に起因する明確な効果を確認することはできなかった。

仲間作り活動評定については放課後子ども教室の利用および年次による変化を示しており、放課後子ども教室の利用の効果のみが有意傾向であった ($F(1,576)=3.76$, $p=.053$) (図 2)。

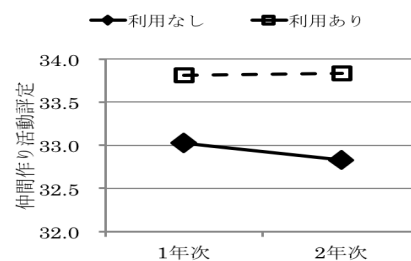


図 2 放課後子ども教室の利用と年次毎の保護者による児童の仲間作り活動評定

また放課後子ども教室への参加の有無が「地域評価」に与える影響を検討したところ、1 年次 ($t(440)=1.79$, $p=.07$) 以外の 2 年次 ($t(440)=4.32$, $p < .01$), 3 年次 ($t(440)=2.59$, $p < .01$) において 1 週間に複数回放課後子ども教室に参加する児童の保護者の方が「地域評価」が高く、放課後子ども教室への参加が保護者の地域への評価に影響を与えていることが示された。

さらに、担任による実施状況報告から、1 年生では封筒から用紙を取り出したり、担任の指示に対して、用紙と対応づけて確認したりするなどの基本的作業遂行が難しいことが確認された。

シニアボランティア A 氏とその仲間への半構造化面接の語りから、継続に寄与する要因について質的検討を行った。放課後子ども教室という自由度の高い場の構造を受けて、活動上多くの困難があったこと、活動継続に寄与する自己点検評価としては、子どもの安全安心や成長だけでなく、自己実現の意義をふりかえる視点が重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

川嶋 健太郎・北原 靖子・蓮見 元子.
(2014). 放課後の子どもの居場所の評価と
実態 全国自治体による放課後子ども教室
事業の事業目標と評価指標 こども環境学
研究, 10(2), 73-78.

[紀要論文](計8件)

北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康・生駒
忍・蓮見 元子.(2015). ボランティア活動継続に
寄与する諸要因の検討 - 放課後子ども教室地
域サポーターの語り事例から - . 川村学園女子
大学研究紀要,26,1,101-119.

川嶋 健太郎・北原 靖子・蓮見 元
子.(2015). ボランティアに参加する価値は
いくらなのか? - 有償ボランティアにおけ
る金銭的謝礼がボランティア参加動機に与
える影響 - 東海学院大学紀要 8, 169-178.

佐藤 哲康・生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖
子・川嶋 健太郎.(2015). 小学生の放課後
の過ごし方に関する研究. 川村学園女子大学
研究紀要, 26(1), 139-146.

蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤
哲康・生駒 忍(2014) 大学生の放課後の生活
空間 川村学園女子大学研究紀要, 25, 第2号,
111-123.

佐藤 哲康・生駒 忍・蓮見 元子・北原靖
子・川嶋 健太郎.(2014). 保護者から見た
放課後子ども教室の有用性. 川村学園女子大
学研究紀要, 25(1), 141-151.

蓮見 元子・川嶋 健太郎・北原 靖子・浅井
義弘(2013) 小学校低学年児童の放課後の生
活空間について 川村学園女子大学研究紀要,
24, 第2号, 33-43.

蓮見 元子・川嶋 健太郎・北原 靖子・浅井
義弘(2012) 小学校低学年児童および保護者
を対象とした放課後生活空間評価尺度の作成
の試み 川村学園女子大学研究紀要, 23, 第2
号, 163-174.

北原 靖子・蓮見 元子・川嶋 健太郎・浅井
義弘.(2013). 低学年児童を対象とした集団
一斉の質問紙実施に伴う課題-生活空間評価
尺度を児童に用いる方法の検討-. 川村学園女
子大学研究紀要,24,1,79-95.

[学会発表](計19件)

生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健

太郎・佐藤 哲康 (2014). 放課後生活空
間尺度(児童保護者評定用)の作成(1)
因子構造の検討-日本心理学会第78回大
会発表論文集, 1061.

川嶋 健太郎・生駒 忍・佐藤 哲康・北
原 靖子・蓮見 元子(2014). 放課後生活
空間尺度(児童保護者評定用)の開発(2)
尺度の妥当性に関する検証-日本心理学
会第78回大会発表論文集, 1063.

佐藤 哲康・生駒 忍・蓮見 元子・北原
靖子・川嶋 健太郎.(2014). 放課後生活
空間尺度(児童保護者評定用)の作成(3)
小学生の性別と年による放課後の比較.
日本心理学会第78回大会発表論文集,
1065.

生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健
太郎・佐藤 哲康 (2014). 子どもの放課
後の過ごし方の2側面の3年間 自己評
定データによる追跡の試み 第11回子
ども学会議プログラム・抄録集, 33.

北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康・生
駒 忍・蓮見 元子.(2014). 児童の放課後
の生活状況把握と影響要因の検討-QOL,シ
ヤイネス,学校適応およびサポート環境との関
連-. 日本教育心理学会第56回総会発表論
文集.

北原 靖子・生駒 忍・佐藤 哲康(自主シ
ンポジウム企画).(2014).学校の「外」から学
びを探る-学習が楽しくはかどる環境づくりに
向けて-. 日本心理学会第78回大会(同志
社大学)発表論文集, SS(27).

川嶋 健太郎・蓮見 元子・北原 靖子
(2013). 放課後の子どもの居場所でのタ
ッチパネル型アンケート実施トラブルと携
帯型アンケートアプリケーションの開発
日本発達心理学会第24回大会.

川嶋 健太郎・蓮見 元子・北原 靖子・
佐藤 哲康・生駒 忍(2013). 小学校低学
年児童の保護者による子どもと地域の評
価 日本教育心理学会第55回総会, 113.

川嶋 健太郎・北原 靖子・蓮見 元
子・生駒 忍・佐藤 哲康(2013). 有償ボ
ランティアでの謝礼・証明書発行とボラン
ティア参加動機 日本心理学会第77回大
会.

生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健
太郎・佐藤 哲康 (2013). 生活空間評価

の3年間縦断データを用いた放課後子ども教室設置効果の検証の試み 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 101.

北原 靖子・蓮見 元子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康・生駒 忍. (2013). 小学低学年児童とその保護者による放課後生活空間評価. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 114.

生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康 (2013). 小学校低学年保護者用放課後生活空間評価尺度の確認的因子分析 第10回子ども学会議大会プログラム・抄録集, 35.

佐藤 哲康・生駒 忍・蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎. (2013). 保護者から見た放課後子ども教室の有用性. 日本心理学会第77回大会発表論文集.

蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康 (2013) 大学生の放課後の生活空間 - 大学生用放課後生活空間評価尺度作成に向けて - 日本心理学会第77回大会発表論文集.

北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康・生駒 忍・蓮見 元子. (2013). 地域性を反映できる放課後居場所点検評価指標の検討(その2). 日本心理学会第77回発表論文集.

北原 靖子・蓮見 元子・川嶋 健太郎. (2013). 小学生低学年児童を対象とした質問紙による放課後生活評価調査 - 質問読み上げ・学級児童全員で一斉に実施した現場状況の分析 -. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集.

川嶋 健太郎・蓮見 元子・北原 靖子 (2012). 保護者にとっての児童の居場所の機能とその効果 - 放課後子ども教室の効果の検討 - 日本教育心理学会54回総会, 463.

蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎・浅井 義弘 (2012) 高校生および大学生の放課後の生活空間 - 小学生の放課後の生活空間と比較して - 日本心理学会第76回大会発表論文集.

北原 靖子・蓮見 元子・川嶋 健太郎・浅井 義弘. (2012). 地域性を反映できる放課後居場所点検評価指標の検討. 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1140.

(その他) (計2件)

川村学園女子大学放課後子ども研究会(代表:蓮見 元子 発表:北原 靖子) あびっ子ク

ラブの設置効果に関する保護者調査研究のご紹介. 平成27年度我孫子市放課後事業対策検討委員会第1回会議(2015.5.29)資料

蓮見 元子・北原 靖子・川嶋 健太郎・佐藤 哲康・生駒 忍 (2015). 放課後のまなび - 事例をもとに調べる・考える・広げる - (学術研究助成基金助成金・基盤研究 C・研究報告書) 印刷所 三恵社.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蓮見 元子 (HASUMI, Motoko)
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号: 60156304

(2) 研究分担者

北原 靖子 (KITAHARA, Yasuko)
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号: 60221917

川嶋 健太郎 (KAWASHIMA, Kentaro)
東海学院大学・人間関係学部・准教授
研究者番号: 80360204

佐藤 哲康 (SATO, Tetsuyasu)
川村学園女子大学・文学部・助教
研究者番号: 60637867

生駒 忍 (IKOMA, Shinobu)
川村学園女子大学・文学部・その他
研究者番号: 10701724